

# ひかりと いのちの なかま

光寿院住職 酒生文弥

## 光に影を気づかさされ、生かさされる

### 四苦八苦

生かされていることには、歳をとること、時々病気になること、そしていつかは死ぬこと（往生、浄土に往って生まれる）生老病死が含まれています。これは個人として体験する四つの苦しみです。

また、元氣過ぎると欲望が盛んで「五蘊盛苦」、欲し過ぎて手に

入らず「求不得苦」、嫌な人に会い「怨憎会苦」、愛するものと別れる「愛別離苦」という、社会の中で体験する四つの苦しみがあります。私たちは四苦八苦するのです。

どうして私たちがいのちは苦しみに苦しめあうのか？ どうしたら苦しみを最小にして楽しく生かさされるのか？ どうしたら絶対の平和と平穩をこの世に創っていい

るのか？ いのちにとって大きな課題です。

死という字は「夕（骨）」を「匕（おがむ）」という意味で、骨になった方を弔う人がいて初めて成り立ちます。死別という愛別離苦に出会うとき、私たちは「ああ、いつまでもいてはくれないのだなあ」「無常」と「ああ、こんなに世話になってきたんだなあ」（縁起）を痛感します。

法（ダルマ）の要点が実感できる機会なので法要を営むのです。

私の最初の愛別離苦は、二つ歳下の弟の自死・急逝でした。弟は、知性・品性・性格、一才のどれをとっても私よりずっと秀でていて、多くの友人から愛されていました。特に画才があり、しかも、漫画界の巨匠・手塚治に私淑していて、美術部長のかたわら漫画を描き続け、高3の秋まで何度も「手塚賞」に応募していました。弟ながら、天才的だと思ったものです。

弟は京都大学3年生の時、念願叶って小学館漫画大賞を受賞、『ビッグコミック・スピリッツ』誌に連載する大型新人としてもてはやされました。しかし、純粹すぎたのでしょいか。編集サイドの要求

する商業路線に業を煮やし、自ら筆を折り、その頃からウツにさいなまれるようになっていったのです。

そして、昭和57年1月11日未明、相当に計画的かつ意思的なり方方で自死を遂げました。辞世の手記は、「真摯に考えると、この世はあまりに愚かで、意味や夢がない。僕はそれを創ろうと頑張ってみたけど、カネまみれの現実の中ではそれも叶わない。苦悩の末、ようやく魂が極めて平穩を得たので、自ら示寂する」という要旨でした。

福井県の浄福寺という8世紀（753年）から続く寺に育った私たちですが、家族、とりわけ母の取り乱した慟哭は、今も鮮明です。

愛する者と死別して初めて、具体的に分かる仏法の要。それを転がすおおいなる慈悲。

当時、私は松下幸之助塾長から直接ご講和・懇談をいただける（財）松下政経塾の第一期生でした。打ちのめされた私は自らが救われたく、また、かねてより抱いていた「宗教の全体像」を見極めたい（そして、「靈性統合」を実現したい）の思いつから、2年で塾を辞して龍谷大学大学院に転じ、仏教と比較宗教を研究する生活に入りました。

## 無明と煩惱

戦争に明け暮れた20世紀、哲学者ショーペンハウエルは「世界の本性は盲目なる(目覚めていない)生への意思」であると喝破しました。目覚めていない、いのちが見えていないことを無明と言います。

お釈迦様が目覚められたダルマは、「諸行無常(一切は絶えず生成発展している)」と「因縁生起(一切は因果関係で相互に依存して起こっている)」を二つの柱とする宇宙生成発展の法則です。この心理が見えないままに、無常なのに執着し、縁起をわきまえずに業(カルマ、行為)を造ってしまふから、こころは悩み、体は煩うのです。罪悪(いのちを損なうつま重ね)と煩惱とはそういうことです。

本来のいのちが濁ったものが、煩惱です。濁らせる原因は、観妙



なままの、怒り、貪欲、愚痴。これを三毒と称し、毒がこころに廻ると「煩」、体に廻ると「惱」となってしまうのです。ただし本来、「本能(フロイトの言うリビドー)」は生かされるためのエネルギーですから、大きな氷は解ければたくさん水になるように、激しい煩惱を精力善用できれば、自分と周囲を極楽に向けているところ(菩提心)も大いに発揮できるのです。「煩惱即菩提」と説かれています。

ダルマに目覚められたお釈迦様は「智慧(お日様にライトアップされ華き清められた知力)」と「慈悲(悲しみを慈しみ元気づける愛の心)」を備えた「仏陀(目覚めた人)」になられました。その仏が説かれた教え、それを学ぶものが自らも仏になれる教え、それが仏教です。私たちは罪業や煩惱を抱えて暮らしています。しかし、自分の影に気づけば、影を影にしている無限の光に目覚めていけます。お釈迦様は無量の光に照らされている本来のいのちに目覚められたのです。

## 哲学と仏教

お釈迦様は王子として英才教育を受けられていたので、仏教は理

路整然と説かれています。印度哲学とも言われる所以です。哲学は、あくまで主観的に理性と知性の「言葉のはしごをかけて」真理を追究する言葉です。これに対して、仏教は、先ず自身が真理を体験して、その純粹体験から「言葉のはしごを引き上げて」を説かれています。お釈迦様は、偉大な哲学者にも思えますが、理性から真理に向かっているのではなく、真理そのものの中におられて、そこへ言葉を紡ぎあげておられるのです。道徳は、靈性から演繹される道義であり、それを人間関係に応用・実践するものが倫理です。

## この世に生かされてある奇跡

この地上世界に生まれて、しかも人間として生かされていることは、極めて有難い(有ることが難しい)奇跡です。仏教はいのちへの感謝が始まります。すべての宗教は「善でありなさい」と説いています。でも善悪って何でしょう？

日々いただいているご自分のいのち、他の人々のいのち、そして環境にみなぎっている、あらゆる生き物のいのち(一切衆生)を大切に

して育むこと、それが善です。反対に悪とは、いのちが見えなかつたり粗末にしたり、傷つけたりすることです。

残念ながら、現代も人間は悪に染まりやすく、DV・いじめ・学校内暴力・傷害殺人など、暗澹たる事件は毎日報道されています。そして果ては、見ず知らずの人間集団が大量に計画的に冷酷に殺しあう戦争やテロも後を絶ちません。生かされているいのち、いのちへの感謝を皆様と今後も考えていきたいと思っております。

## 酒生文弥

1956年9月8日 福井市篠尾町

浄土真宗本願寺派浄福寺

(753年創建)に生まれる

1980年3月31日 早稲田大学

政治経済学部卒業

1982年3月31日(勸)松下政経塾

(第1期生)修了

1987年3月31日 龍谷大学

院博士後期課程修了(仏教学・比較宗教学)

同大学院から昭和59年9月、

昭和60年8月カリフォルニア

大学大学院宗教学研究科へ文

部省奨学生留学

1986年1月〜12月 ニュージャ

ージー州立ラトガース大学大

学院ヘロータリー奨学生留学

浄土真宗本願寺派 得度(僧籍)

教師(任職資格) 頭座(僧侶最高位)

光寿院 www.kojin.com/